

めでいかすどる
Médicastre



「鼠ヶ関の弁天島」

鶴岡地区医師会

21年 4月号

「認知症：診断と治療の進歩」

弘前大学大学院医学研究科 附属脳神経血管病態研究施設
脳神経内科学講座 教授 東海林 幹 夫 先生

先進各国とアジア諸国では人口の高齢化とともに認知症が爆発的に増加している。認知症は世界の60歳以上の11.2%で、脳血管障害(9.5%)、筋・骨疾患(8.9%)、循環器血管疾患(5%)、悪性腫瘍(2.4%)より多いとされ、現在2,430万人が認知症と推計されている。毎年460万人ずつ増加し、2040年には8,110万人に達すると予想されている。本邦でも既に200万人を超しており、少子高齢化時代を迎える15年後には人口の11%、400万人と推計されている。今後、インド、中国、南アジアでは100%の増加、西太平洋地域で300%の増加と見込まれており、特に開発途上国の認知症の増加が懸念されている。現在、イギリスでは82億ドル、アメリカでは1000億ドル、日本では4兆円の年間医療費が費やされており、今世紀の中頃には、経済、宗教、人口や環境問題とならぶ大きな問題の1つと考えられている。最近の統計では、この認知症の半数がAlzheimer病(AD)である。さらに、この上に軽度認知障害(Mild Cognitive impairment:MCI)と言われるAD予備軍が存在し、有病率は75歳以上の15%、60歳以上の3%と推計されている。本邦では介護保険の開始と塩酸ドネペジル(アリセプト)の発売を機に、全国各地のもの忘れ外来や集団検診も盛んとなり、デイケアやグループホームなどの施設、かかりつけ医、ケアマネージャーやサポーターの育成などの社会的な支援制度も充実してきた。病態と診断・治療の面ではA β の代謝とその異常によるADの発症機序に基づいた治療法の開発、脳アミロイドの画像化や脳脊髄液(cerebrospinal fluid:CSF)A β やタウ蛋白(tau)などのバイオマーカーの開発などの重要な発展があり、より早期のADの診断やレビー小体型認知症(Dementia with Lewy bodies:DLB)、前頭側頭葉性変性症(Frontotemporal lobe degeneration:FTLD)などの非AD型認知症の病態解明にも飛躍的な進歩がみられている。最近ではこれらの認知症を早期に確実に診断・鑑別するための神経心理学的検査の標準化やより客観的な診断のためのバイオマーカーや画像診断に関する研究が進んでいる。脳アミロイドに対する根本的な治療法も臨床治験段階に入っていることなどの理由から、早期診断・治療の可能性への期待が高まっている。本公演では認知症について簡単に説明した後、実際の診断の過程を示し、最近の進歩について述べる。現在の治療である抗アセチルコリンエステラーゼについて紹介し、ここ数年に著しい発展が見込まれている免疫治療についても言及する。

日時：平成21年3月27日(金)

場所：マリカ市民ホール

総会後の懇親会、米寿・喜寿祝賀会並びに病・医院永年勤続者表彰式

【米寿・喜寿を迎えられた会員】

米寿 佐藤 擴 先生 松浦 英夫 先生

喜寿 高橋 良士 先生 鈴木 伸男 先生 後藤 興治 先生 佐久間 正昭 先生

【永年勤続者表彰受賞者】

黒羽根整形外科 坂井 純子

鶴岡地区医師会 難波 秋夫

黒羽根整形外科 渡部 和子

鶴岡地区医師会 芳賀 直美

こどもクリニックすずき 鈴木 まき

鶴岡地区医師会 宮崎 純子

宮原病院 阿部 順子

鶴岡地区医師会 御橋 慶治

宮原病院 斎藤 章子

鶴岡地区医師会 渡部 はつせ

宮原病院 佐藤 真理

鶴岡地区医師会 石井 千佳子

三井病院 原崎 妙子

鶴岡地区医師会 佐藤 和子

三井病院 五十嵐 香苗

鶴岡地区医師会 田村 安

三井病院 本間 由紀

鶴岡地区医師会 木村 由美

鶴岡地区医師会 佐々木 幸一

鶴岡地区医師会 菅原 由紀

鶴岡地区医師会 池田 順子

謝 辞

宮原病院 阿部 順子

本日は、このように永年勤続の表彰式をあげていただきましてありがとうございます。

厚くお礼を申し上げます。

この日を迎えることが出来たのも、先生方をはじめ、職場スタッフ皆様方のご指導、ご支援があったお陰であると感謝致しております。

医療事務の仕事につき、22年という月日の中で、医療を取りまく環境も変化してまいりましたが、その中で充実した日々を送ることができた事を実感し、誇りに思っています。

また、仕事をしてきた中でたくさんの方々とお会いしたことは、私にとって大きな財産になっております。

これからも、医療人の責務として、各自の果たす役割を認識し、患者さんに安心な医療を提供し、満足して頂く事ができるよう努力をしてまいりたいと思います。

今後もよろしくお願い致します。

本日は誠にありがとうございました。



新型インフルエンザ対策を考えるときに必要なこと

鶴岡地区医師会感染症対策委員会 岡田 恒人

平成 21 年 3 月 23 日に“庄内地域新型インフルエンザ対策行動要領”改訂版が庄内保健所の HP に掲載されました。今回は行動要領のみならず一般市民の方へ向けたガイドも掲示され、一般の方へこの疾患に対する理解を広げていこうとする行政機関の努力が感じられる内容となっています。

今回の行動要領の変更は、平成 21 年 2 月に改訂された国の“新型インフルエンザ対策行動計画”を受けての内容となりました。過去の行動要領との大きな違いは、流行段階をフェーズ 1 から 6 段階にわけ海外発生を A・国内発生を B としていた表現方法から表 1 のように未発定期から小康期へと分けてイメージしやすくしたこと、対策の主軸を流行阻止から流行した場合の対応へ移したことです。具体的には表 2 の“庄内地域の医療体制”に示されているように発生段階に応じた対応策のようになります。しかし実際に新型インフルエンザが流行し始めたときにこのような対応ができるかについては、まだ不透明な部分があることも事実です。特に発熱外来の運営については我々医師会の役割が大きく、各会員が発熱外来へ参加協力いただけるか、またその運用についてなど今後も十分な議論をしなくてはならないものと思われます。新型インフルエンザは地震などの自然災害と同じようにいずれ必ず出現し避けることのできない災厄です。その被害（重症度）はどの程度のものなのかまだまったくわかりませんが、恐れすぎず侮らず実行性のある対策に育てていくために今後も御協力おねがいたします。

4 月に入り暖かくなってきたにもかかわらず診療所や休日診療所へ、多くの A 型や B 型のインフルエンザ患者さんが受診されています。大人の患者さんは孫や子供から感染したことが疑われ、その子供たちは春休みに入り間もなく発症していました。卒業式などの集会で罹患したようでした。その卒業式にはインフルエンザに罹患しているにも関わらず出席していたケースもあったようです。そこで罹患しさらに家族に広がった様子が想像されます。インフルエンザ感染予防よりも卒業式が優先されるように一般の方の感染予防の意識はまだまだ低く、このままの状態では新型インフルエンザが発生した場合の患者数は膨大な数になることが想像され、せっかくの行動要領も画餅となってしまいます。新型インフルエンザ対策は医療器具の充実や、新薬の開発で対応できるものではなく、地域における医療機関の協力と一般の方々の感染予防意識の向上が最も重要で必要な武器であると思われます。

新健診センター建設準備室便り No3

3月上旬より敷地測量・土質調査が実施され、3月31日にはそれぞれの業者から成果品の引渡しと業務完了報告を受けました。

3月18日(水)には会員の先生方への第1回説明会が行われ、新健診センター建設委員会の立ち上げと体制、新センターのコンセプト、設計業者選定(プロポーザル方式)結果と現況報告、建設予定地・今後の建設スケジュールについての説明を行いました。また設計業者による建物・環境を含めた基本構想についてプレゼンテーションも行われ、質疑では会員の先生方から多くのご意見・ご質問を頂きました。なお、「第2回会員説明会」は6月に予定されていますので多数ご参加くださいますようお願いいたします。

会員説明会後の第7回建設委員会では設計業者も交えて、今後の基本設計に関する打合せのスケジュール、検討内容についての確認が行われました。また、レディースフロアの考え方について検討を行い、男女別検診フロアも視野にいれながら、進めていくことになりました。

3月の下旬から基本設計に入り、現在建設委員会では各室の名称・室数・現センターとの機能分担について検討を行っています。これを基にして6月末まで設計業者と各室の配置・面積・レイアウト等について詳細な打ち合わせを行い、基本設計を終え、実施設計に入ることとなります。

4月5日(日)には建設委員の先生方と職員とで酒田の山形県結核成人病予防協会庄内検診センターの視察に行ってきました。同じ庄内地域の健診センターという事もあり、受診者・スタッフの動線やハード面等、どのような工夫・配慮をしているのかを見学でき、今後基本設計を進めていく上で大変参考になりました。

庄内プロジェクトにおける IT 化の状況について

株式会社ストローハット

代表取締役 鈴木 哲

この4月からは2年目を迎える庄内プロジェクト。地域で支えるがん緩和医療を、地域の医療機関が一体となって推進する本プロジェクトですが、医師、看護師、訪問看護師、薬剤師、メディカルソーシャルワーカー、ケアマネージャー等々、様々な立場の医療機関や医療関係者が関わる必要のあるところが非常に難しいところでもあり、それは言い換えれば非常に進歩的なところでもあります。

そのような様々な立場の人が集まり、同じ目標に向かって進むためには、どのようにして情報を共有していくかということが、プロジェクトを前進させるためにはひとつの大きなポイントとなります。当地区が長年培ってきた Net4U を中心とした IT 技術は、それを支える有用なツール群であり、他の戦略研究介入地域からも注目される重要なトピックとなっています。

以下に、現在行っている IT 化の取り組みの経過報告をさせていただきます。

(1) Net4U の活用と推進

地域の病院、診療所、訪問看護ステーション等が患者情報を共有し、施設や職種を越えて診療方針の共有が実現できるインターネットツール「Net4U」は、病院において緩和ケアが始まり、退院カンファレンスを経て、かかりつけ医、訪問看護ステーション、ケアマネージャーによる在宅緩和ケアを行っていく庄内プロジェクトにおいては、まさにうってつけのツールであり、他の地域からも注目され羨望する当地区独特の IT ツールです。

庄内プロジェクトでは IT 活用委員会を早期に立ち上げ、介入患者全例を Net4U 登録し情報共有を行ってきています。Net4U 上には退院カンファレンスシートや紹介状、看護サマリーが添付され

るとともに、病院主治医、在宅主治医、訪問看護師の間でのコミュニケーションが実現されています。

今までの Net4U では主として医師、看護師の利用を前提としておりましたが、地域で緩和ケアを支えるためには、調剤薬局や介護・福祉の領域までその範囲を広げる必要があります。それに向けて現在、Net4U の利用規約やセキュリティガイドラインのアップデートの検討を進めており、今後はさらに大きな枠組みでの Net4U の活用が実現できるようになる予定です。

(2) 地域リソースデータベースの作成

「地域にどのような医療機関があり、そこでどのような医療が提供されているのかがわからない」。このような声は、一般市民はもちろんですが、医療者からも多く聞かれており、このような情報の不足が昨今騒がれている医療崩壊の一因ともなっていることは否めません。緩和ケアに関しても同様で、どの病院、診療所ではどのような医療が提供されているのか、どの介護福祉施設ではどこまでの医療行為ができるか、どの調剤薬局に麻薬の処方が可能であるか等々、治療やケアに必要な情報が十分に提供されていない状況であります。

当地区では、既に開業医の先生方にはアンケートのご協力をお願いしてあり御存じのことかと思いますが、庄内プロジェクトと医師会が一丸となり、地域の医療情報を共有し活用できるような、地域リソースデータベースの作成に取り掛かっています。緩和ケアに関わらず、どのような治療が提供できるかといった情報、所在地の情報、診療時間の情報を、医師会イントラネット上で検索できるようにします。また今後はその情報の一部

を市民にも公開できるようにし、医療者にとっても市民にとっても、地域の医療資源についての情報不足のために不便を感じないような情報を提供していく予定です。

(3) 庄内プロジェクトホームページの作成

「緩和ケア」とはまだまだ市民にとっては聞き慣れていない言葉です。また、当地区では「庄内プロジェクト」という名のもとに、緩和ケアについて地域が協力して支えていくという体制をとり、多くの医療機関が協力しているということも、まだまだ市民に十分に知られている状況とは言えないのが現状です。

まずは「緩和ケア」そして「庄内プロジェクト」を知って頂くことが、地域での緩和ケアを浸透させるための第一歩であり、そのために庄内プロジェクトではホームページを開設しました。

<http://www.shonai-project.net/>



ホームページ上では、「緩和ケアとはどんなことなのか？」といった基本的なことから、「実際に庄内プロジェクトとして当地区ではどのような活動が行われているのか？」といったこと、そしてなにより「まずどこに相談すればいいのか？」といった情報まで、市民にとって当地区において緩和ケアを受けるに当たって必要な情報を公開しています。また、緩和ケアスキルアップセミナーや地域カンファレンスといった、市民だけではなく医療関係者にとっても必要な情報を共有できる情報共有サイトも作成しており、地域全体での緩和ケアへの取り組みをサポートする IT ツールとしても機能して行く予定です。

はじめに述べました通り、様々な立場の医療機関や職種が同じ目的に向かって取り組むためには、どのように情報を共有していき、目標を共有していくかが非常に大切になります。庄内プロジェクトでは、「緩和ケア教育」「市民啓発」「地域連携」「専門緩和ケアの充実」という、プロジェクトを推進するための四本柱（図）を軸として、様々な取り組みが検討され、実施されています。どの取り組みにおいても、ITはそれらを横断してサポートするツールとして、プロジェクト全体を支える役割を担います。当地区は医療 IT の先進地域であるという特性を活かし、IT 活用の面では他の地域をリードしていくという認識を持って、今後も広く緩和ケアにおける IT の活用を進めていく予定です。

庄内プロジェクトの「四本柱」を支えるITツール



日常診療における笑いの活用

黒羽根整形外科 黒羽根 洋司

笑顔を忘れず、必ず相手の目を見て話すこと。医者が笑えば患者も笑い、穏やかな会話はより良い医師対患者の関係を生むことになる。患者に接する者はすべて、常に温和で魅力ある顔を作るトレーニングをするべきである。

日常診療におけるスキルの一つとして、“笑い”のもつ意味とその有効な使い方について述べる。

【いま、なぜ“笑い”か】

まずは、私たち医療従事者を囲む環境から笑いの意味を考えてみる。

1. 病気・対象疾患の変化と健康管理・治療内容の変化

日本は世界一の長寿国となった。この急激な社会構造の変化とそれに即応した形で進歩した医療は、私たちが対象とする病気・疾患の内容を否応なしに変えてきている。

これまで多くを占めていた感染症、急性疾患は減少し、環境起因疾患、生活習慣病や心因性疾患が増え、高齢者に至っては認知症が大きな問題となっている。

疾患地図の変化は、必然私たちが果たすべき治療内容にも影響を与えている。病気の治癒を第一義においたこれまでの医療は、予防ひいては健康増進をはかるものとなった。対象は有病者ばかりでなく全員となり、問題発見の場は日常生活全般となった。

2. 医師と患者の関係と医師の役割の変化

1から導かれる医師—患者の関係も、これまでの治療者と被治療者という縦のものから、共同作業すなわち横の関係となる。医師には「科学者」「技術者」のみならず「援助者」としての資質も要求されるようになったといえよう。

「援助者」たる医師の能力の一つに「患者を笑わせる」ことも含まれてもいいのではないかと笑

い療法士3級の筆者は考える。

【笑いがもたらすもの】

笑いにはさまざまな効用があるが、井上宏氏による4作用が至当である。（『笑いは心の治癒力』海竜社）

1. 親和作用：ともに笑うことで気持ちが和らぎ、口も軽くなる。
2. 誘引作用：笑いの絶えない楽しい人には人が集まる。
3. 浄化作用：つらい時、腹が立つ時でも笑いが立ち直りを早くする。
4. 解放作用：ものの見方を相対化し複眼的にしてくれる。

こうして笑いは人の頭と心を柔軟にする作用があり、この力を日常診療に使わない手はない。笑いは伝染力が強いものであるから、いつの間にか患者も笑い、不安や緊張感が解け、医者の説明も良く頭に入るようになるのである。

【会話に笑いを添えて

—医者が笑えば患者も笑う—

笑いはどこでも誰にでも使え、何の道具も必要としない料理でいえば調味料のようなものである。あいさつに入れても、会話に添えても、表情や態度に振りかけても、独特の風味を醸し出す。

笑いは食感や味を引き出す“つなぎ”でもある。笑いを活用することで、医者と患者の間、ひいては医療従事者同士をうまく調和させ、親密度を強める。人と人とを結ぶ大きな絆、それが微笑みである。

【いい笑いを人に送るために】

忙しい日常診療だけに、患者との短い対面に笑いを有効に使い活かすには日頃から心がけが大切である。

笑顔のポイントは目と口である。必ず目を見て話すことであり、目を見てニッコリの積み重ねは、まわりに集まって来る人を間違いなく明るくしてくれる。「目は口ほどにものを言い」、「口も目ほどに訴える」のである。口に微笑みを浮かべ、相手の反応を確かめながら話せば、決して早口にならず、ひいては相手にじっくりと考える時間を与えることになる。

さらに、いい笑顔美人でいるためには私たち自身が感性を磨いておくことが大切である。美しいものを見て素直に感動する。単純な楽しみを味わって喜ぶ。心に残るいい話、身近な話題のなかに、他者と共感できることのストックを増やしておくべきである。





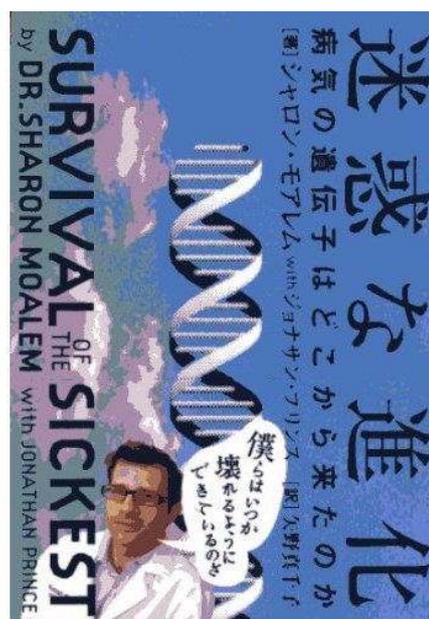
中村秀幸

中学に入学したての頃、生物学の授業がえらくまぶしく楽しかった。というのは学問とかいう大それたものではなく、担当の斉藤栄輔先生が偉くて素敵でかっこよかった。細胞の各名称や、生物の分類（種属科目網門界ってな感じで）、被子植物や裸子植物、リンネの系統樹、花の各部の名称など、今から考えると系統だった学問と呼べる代物ではなかったが、ただ「覚える」ことが楽しかった。試験を受けるとクラスで一番よい点数をもらえた。その先生は頭をなでるようにしてほめてくれた。褒められることがうれしかった。もっといろいろなことが知りたくなった。今は無き酒田青山堂や大火で消失してしまった中町の本屋には高校に入ってから帰りに講談社ブルーバックシリーズなどを読み漁った。

大学受験は一浪して東北大学理学部に晴れて合格、米袋の下宿まで下見して仙台片平キャンパスを闊歩する夢を描いていた。ところが国立大学が一期校、二期校時代で、両親が熱心に勧めてくれた山形大学の医学部の受験にまぐれで受かってしまった。僕は医学部へ進む気はなかったのだが、当時借金に追われていた両親に説得され、医学部でも「生物学」の分野もあるんだとか何とかそそのかされ泣く泣く山大に進学した。

山大に入学後も、特に教養部の2年間はテニスと本読みの毎日が続いた。根本和夫君という相馬高出身のきれものが出て「読書会」を月1回日曜に開催した。残念ながらこの会はドキュメンタリーや論説、小説などが主体で科学物はほとんどなく、というか読書会にはもともとなじまないものだった。確かに医学部の基礎科目としての生化学や分子生物学の授業はとても興味深いものだったが、現在もその生物学者になる「夢」ははまだ持ち続けている。一昨年からはまった海のダイビングも、この世とは思えない神秘的な海底の世界にどこか、綿々と続く進化や多様な生き物の形に、生物学においを嗅ぎ取っているのかもしれない。

リチャード・ドーキンス「利己的な遺伝子」、バージェス頁岩での壮大なカンブリア紀の生命爆発を描いた S・J・グールド「ワンダフル・ワールド」、リチャード・フォーティの「三葉虫の謎」、マット・リドレー「やわらかな遺伝子」、アンドルー・H・ノール「生命 最初の 30 億年」など強烈な印象を受けた書物は枚挙に暇がありません。つい先日の朝日新聞にもフォーティの新刊案内がでていました。医者としての生活をしていると、夏休みや年末年始などまとまった時間がなくて、この至福の時間が持てないのが残念ですが、この今年の正月に読んだシャロン・モレアムの「迷惑な進化=病気の遺伝子はどこから来たのか」(NHK 出版)は久しぶりにわくわくしました。著者は新進気鋭の(進化医学)遺伝子学者ですが、内科の日常の臨床で疾患を扱う医師の臨床感覚に十分に訴えるものがありますし、内容も十分に納得できる範囲の内容です。「人間」をホモサピエンスというひとつの種として俯瞰し、鉄分や血糖値、血中コレステロール、親からの遺伝の話などトピックが満載で一気に読み終わりました。お勧めですよ。興味のある方はぜひ一読を。



スキー同好会紹介

日時:平成 21 年 3 月 14(土)・15(日)

場所:湯殿山スキー場

検診課 今野 篤子



恒例の医師会スキー同好会の合宿が、3月14日(土)、15日(日)の2日間にわたって湯殿山スキー場で行われました。今年で15回目となりましたが、先生方の参加も少なく、総勢20名と少し寂しい合宿となりました。

1日目は天候に恵まれず、朝から雨でした。そのため、午前中は滑らずに終わり、朝からビールを飲んでいたり人も多かったようです。昼食は例年通りクラブハウスでにぎやかに行われました。今年の昼食はステーキで、朝から飲んでいたり人達は更に酒量も捗ったようです。

午後は雪になり、ゲレンデに繰り出す人も多くなりました。私は午後からの参加だったので、少しでもたくさんリフトに乗りたいという気持ちが強かったのですが、雪・風ともに強く、まだまだ初心者の私にはとても過酷なコンディションでした。外に出るのがとても億劫だったのですが、一度滑り出すと楽しくなり夢中になっていました。天気が悪いのは残念でしたが、ゲレンデにあまり人が居ないため、周りを気にせず自由に滑れた点はとても満足でした。

宿泊は例年通り「民宿なかだい」で、宴会は6

時から壽一先生の乾杯で始まりました。今年はずばしよからの参加者も多く、たくさんのおいしい料理とお酒の中で職員同士の交流が深まりました。

2日目は朝食後に解散しましたが、前日滑り足りなかったせいか、またゲレンデに繰り出した人もたくさんいました。今年も全員怪我なく合宿を終えることができて何よりでした。

最後に、合宿の準備と運営に当たられた幹事の皆様に厚くお礼を申し上げます。

来年の合宿は蔵王という案も出ているようなので、経験者も未経験者も大勢で参加しましょう。



◆ ホームページリニューアルのお知らせ ◆

学術広報部長 中村秀幸

このたび鶴岡地区医師会ホームページをより分かりやすく使いやすくするためにデザインの刷新を行いました。

今後ともコンテンツの充実に努め、皆様のお役に立てるホームページになるよう心がけていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

尚、リニューアルに伴う URL の変更はありません。

鶴岡地区医師会ホームページ URL : <http://www15.ocn.ne.jp/~tsurumed/>



会長挨拶



社団法人 鶴岡地区医師会
会長 中目 千之

鶴岡地区医師会のホームページにアクセスいただきありがとうございます。鶴岡市は山形県内地方の南部に位置し、市町村合併により東北一の番付を有する市となり、平成21年1月1日時点での人口は40,210人です。鶴岡地区医師会(A会員89人、B会員100人)は、この鶴岡市と隣接する三川町を対象地域とし、「市民の健康をまもる」を理念として、数々の活動をおこなっております。その主なものとしては、庄内地区健康管理センター、鶴岡看護学院、在宅サービスセンター(訪問看護、訪問リハビリ、訪問入浴)、クラブセンター「ふるまのど」、地域包括支援センター「つくし」、清田川温泉リハビリテーション病院、介護老人保健施設「あけぼの」などです。さらに、平成20年度からは厚生労働科学研究がん対策のための普及のための地域プログラム」の地域に選定され、また、同研究「乳がん検診」における検証するための比較試験にも参加し、鶴岡地区におけるがん対策を構築するための努力をしております。このホームページも活用いただき、鶴岡地区医師会の健康事業にご理解願えれば幸いです。

基本理念



庄内地区健康管理センター

基本方針

安全管理の徹底と精度管理の向上に努め、信頼されるサービスを提供します。受診者が安心して心からつらがる健診、療養(作)に努めます。職員相互の連携を固め、健全な職場を目指します。職員の教育、研鑽に努め、センター機能の充実、向上を図ります。

社団法人 鶴岡地区医師会

TSURUOKA MEDICAL ASSOCIATION

医師会紹介 | 関連施設紹介 | 医療機関案内 | リンク | 広報のひろば | アクセス



LAST UP DATE 2020/04/15

NEW 新着情報

21/04/15 鶴岡地区医師会ホームページがリニューアルしました。

医師会からのお知らせ

[特定健診実施医療機関一覧について](#)
[本人案内](#)
[休日診療案内](#)

医療相談
メディカルパーク

Net4U

庄内プロジェクト

医師の職業規則

個人情報保護規則

めでいかすとる

川町の一般の住民の方の健康管理を目的とし、健診事業及び地域医療ネットワーク、全国健康保険協会管掌健康保険生活習慣病予防健診、事業所など利用される方のニーズに対応するべく努力しております。また、検診実施しております。理検査、地域の病院・医療からの検体検査を行っています。精度管理に管理に参加しており、いづれも良好な成績を修めています。

できるよう、各種コースをご用意しております。



アクセス



社団法人 鶴岡地区医師会

〒997-0035 山形県鶴岡市馬場町1-34 TEL 0235-22-0136
E-mail tsurumed@jupiter.ocn.ne.jp

【障会】〒997-0035 山形県鶴岡市馬場町1-34 TEL 0235-22-0136 E-

このサイトは複製されている場合、著作権など無断で複製することを禁じます。
Copyright(C)2004 Tsuruoka Medical Association.

鶴岡市休日夜間診療所からのお知らせ

☎ 0235-23-5678

◎ 日曜日と祭日に医師会の医師が担当します。
◎ 担当医師が変更する場合があります。
◎ 平成19年4月より休日夜間診療所の診療体制が変更になります。

内科 ◎ 午前8時～午後5時

外科 ◎ 午後1時～午後5時

小児科 ◎ 午後9時～午後0時

夜間 ◎ 午後8時～午後9時



| 月 日 | 昼 間 | | | 夜 間 |
|--------|--------|-------|--------|--------|
| | 内科系 | 小児科 | 外科系 | |
| 1日(日) | 藤越 直也 | 今立 明宏 | 黒羽根 洋司 | 佐久間 和弘 |
| 8日(日) | 岡部 進 | 真島 靖子 | 黒澤 明充 | 犬塚 博 |
| 11日(水) | 佐藤 孝司 | 三井病院 | 阿部 周市 | 中里 純 |
| 15日(日) | 佐久間 豊明 | 小野 俊孝 | 志田 秀隆 | 斎藤 純夫 |

表 紙

「鼠ヶ関の弁天島」

佐藤元昭

2009年1月11日 新潟県側より撮影。
冬の日本海の一景です。

～ 編集後記 ～

中村 秀幸

ようやく春めいてきました。そよぐ風の香りも春、梅の花が満開です。桜のつぼみもふくらんできました。

4月の幕開けは「テポドン」狂騒曲でした。日本は向こうの思惑通りのリアクション、右往左往でしたが、オバマ大統領は「ミサイル」と明言し非難しています。韓国やアメリカの徴兵制のない日本って平和ぼけなのでしょう。「情報」をいかに正確に伝達することの難しさを痛感しました。

今月号から、新しい企画、リレーエッセー「大切な本、思い出の曲」を始めます。まずは私からということですが、気楽な1ページ程度の散文です。声をかけられましたら気楽に投稿の程お願い致します。一人でも多くの会員の先生にお願いしたいと思っております。

いよいよ新健診センターの設計が本格化します。基本設計は4月からの3ヶ月間が勝負で、おおよその骨格がこの時期で決定します。6つの建設コンセプトを基本として、建設委員会のメンバーは、各部署毎の現状の把握、問題点の洗い出しや他施設の視察、プラバシーを保つ動線と部屋の配置にこれから悪戦苦闘の日々です。20-30年先にも残る「成果物」ですし先見性も大切です。

今年度も、同じ学術広報担当のスタッフで、広報活動や学術関係の仕事を進めていきます。現在医師会は多くのプロジェクトを抱えております。タイムリーな勉強会や講演会の企画、会員への確実なアナウンスに励んでまいります。多くの参加を期待しております。今年度も自重をこめて「藪医者：メディカストル」、ご愛読ください。

編集委員：中村秀幸・伊藤末志・福原晶子・斎藤憲康・小野俊孝・渡部隆二

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町27-1 TEL 22-0936(代)